

---

# プリンセス商会

八木羊子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プリンセス商会

### 【Nコード】

N9722P

### 【作者名】

八木羊子

### 【あらすじ】

商家の一人娘として愛されて育ったりせのもとに、憧れの姫君から迎えがくる。

そのことで明かされた自分の出生の秘密。

なんとリセは、姫の双子の妹だった。

（連載の1章だったのですが更新が滞っていたので一部を改変し、短編作品としました。おいおい「プリンセス商会」シリーズとして短編を載せていきます。更新をお待ちくださっている方々、申し訳ありません。）



## プロローグ（前書き）

少しづつ書きためて、章ごとに掲載していきます。  
ハーレムとまではいかないでしょうが、ラブコメになる予定です。  
ゆるりとどうぞ。

## プロローグ

高く結い上げたはちみつ色の優しい色の髪に指したパールの簪をベツドの上に投げつけ、同じ色に輝く瞳を伏せる。

さくらんぼ色の唇をきゅつとひきしめると、リセは足盥を蹴った。中のお湯がじゃぶんと揺れて、周囲の絨毯に濃い染みが広がる。

「リセ様、落ち着いてくださいますな」

「ニーナあ。もうあたし姫君なんてやだやだ、パパとママのところに帰る」

「お辛うございますな。でも辛抱のしどころですよ。旦那様も奥様もお嬢様のことを応援してらっしゃいますよ」

「だってあの伯爵家のインケン姉妹、『今時その髪型はダサすぎますわよ』『その百合柄も今年は誰も着ませんわよ、やはり王女様は庶民のお育ちだけあって流行も庶民並みに遅れてますのね』って言ったのよ。今年はタッセルだって。ママが用意してくれたこのドレスを馬鹿にしたのよ」

初めて参加した侯爵婦人主催のお茶会で、初対面の貴族の令嬢達から重箱の角をつつくようにねちねちと嫌みを言われていたのだ。

一年前の市井の社交界の花だったリセなら、そんな無礼なことは言わせなかった。

だが、まだ慣れない貴族社会という環境にいる自信のゆらぎが、王女であるリセに彼女らの付け入る隙をあたえてしまった。

そしてそんな自分のふがいなさは何より情けない。

足を洗い終わり布で足をぬぐっているニーナは、愚痴るリセに『ハイ』と生返事をしている。

リセはようやくニーナから足を解放されるとそのまま広いベッドにダイブし、枕の横に並べてあった熊のぬいぐるみのベルシャをぎゅ

うぎゅうと抱きしめ転げまわった。

「こんなことじゃ負けないわ。私はイラカ家のリセよ。絶対お姉様みたいな完璧な姫になってやるんだから！」

## 出生の秘密

リセはキハの国の名だたる豪商、イラカ商会の一人娘として、何不自由なく愛されて育った。

城下で一番の美少女。

頭も良く見目麗しい、だがおてんばで気さくなお嬢さん。

そんな町中から愛されていた少女は、女の身ながら将来は父の後を継ぐという志を胸に暮らしていた。

ところが14歳になった日に、王宮から使いが来た。

商会は王室御用達の品も多く扱う為、王侯貴族の使いの者が出入りするの珍しいことではない。

だが、今回はあえて下級貴族が使うような地味な馬車で裏口につけ、使者は秘密裏に館に招き入れられた。

そして質素な衣に身をやつした使者は、蒼白になった両親とたまたまそこに居合わせたリセの前で告げた。

「リセ様に今すぐ王宮へお越しくださるよう、姫君のお召しです」

第一王女のリエラはこの国の少女達の憧れの姫君なので、リセも彼女のことはもちろん知っている。

王妃は王子を4人も設けたが、王女は愛妾のリエラが生んだリエラ一人。

リエラは、彼女が生み側室へと召し上げられる前に亡くなられたはかない方だったという。

その体質を継いだのかリエラも生来体が弱く、城の奥でひっそりと過ごし王家の以外者以外とはめったに合うこともなく、公式行事にも一度も顔を出したことはない。

それでも彼女は国民に愛されていた。

おやさしくて可憐で国で一番、いえ隣国一の美しさの姫君との評判。生来より体が弱く病気がちな為、王宮の奥深くで国王夫妻と王子達に大事に育てられた、深窓の姫君。

そして世間ではあまり知られていないが、リリアは実はリセの母の妹で、彼女とアリエラは従妹だった。

街でたまに見かける王女の絵姿は、リセに似ているとよくからかい半分で言われたものだ。

同じ血を持つため似たところもあって当然だし、しかも誕生日は1日違い。

ただ姫君の絵姿は、髪の色がリセより深い色で、鼻も高く口も小さく、何よりリセよりずっと大人びた顔立ちだった。

だからこそまだ会った事のないこの従姉が憧れであり自慢で、いつか会って手に手をとって従姉妹の名乗りをする日があることを夢みていた。

「これが神様の采配というものかしら、夢が突然かなうなんて！」  
リセは舞い上がって一人はしゃいでいたが、使者に「お早く」と催促されあわてて部屋に戻り着替えを始めた。

乳母のニーナとドレスを選び着替えを始めたところで、母親が厳しい顔をして部屋に入ってきた。

人払いをして二人きりになると、彼女はしばらく沈黙し、意を決したように重々しく口を開く。

「リセ、王宮へあがる前にお話があるの」

「なあに？ママ。支度をしながらでもいいかしら。もちろんお作法のことは分かってますわ。ご無礼のないように最大の礼で……」

「すぐに済みますからここに座りなさい」

母はリセの手をぎゅっと握って引き寄せ、下着姿のまま化粧椅子に



座らせ、自分は手を握ったまま床に膝をついた。

「あなたが16歳の成人の日に話そうとおもってたの。なのにこんな早くにこの日がくるなんて…」

もしかして、私がママの子じゃなかったって告白!?

母の真剣な言葉を耳にしながらも、少女なら一度は夢見る想像を膨らませていた。

（両親は仮の親で、実は自分はお姫様で、ある日お城から迎えが来て…）

「実は、あなたは私たちの実の子じゃないの」

（王様とお妃様に親子の名乗りをして…）

「アリエラ様と同じ、リリアと王様の間に出きた子なの」

（王子様と出会って結婚を…）

「ただ、あなた達は双子だったから一緒にいるわけにはいかなかったの。」

（あなた達?）

「それで先に生まれたアリエラ様は王宮で、あなたは私たちの子として育てることになったの」

（双子?アリエラ様と私が?）

「そう、あなたとアリエラ様は双子の姉妹なの。アリエラ様はあなたのお姉様ね」

「でもお誕生日が1日違うじゃない」

「ちょうど、日付が変わる時にあなた達が生まれたの。アリエラ様

がお腹を出た直後に日付が変わり、その後に出てきたのがあなたよ」  
「じゃあ、本当にママは私のママじゃなかったの？」

「私は子供が出来ない体で、パパと結婚した時からあきらめていたの。だから妹に託されたあなたは神様からの授かり物だと思ったわ。例えば血は叔母と姪でも、あなたを初めて抱いた時から心はあなたのママよ。もちろんパパも。これからずっとリセは大事な娘よ」

いきなりの告白と突きつけられた現実には、リセは目眩に襲われた。

「私がアリエラ様と双子の姉妹ですって？しかも、ママとパパが実の親ではないですって？」

この二つのどちらがショックかと言われると、やはり後者だった。だが、生まれてから受けてきた愛情はどれも疑うものではなかったし、これからも娘だと言ってくれる。

それでももう一度確かめずにいられなかった。

「ママ、なにがあっても私はママとパパの娘よね？」

「もちろんよ。魂に誓って」

リセは抱きしめられ髪の毛を優しくなでられた。

暖かくふわつと髪の毛をなでつけるこの手が、リセは大好きだった。どんなに悲しいことや悔しいことがあっても、慰められ、癒され、励まされてきた。

そして今も。

「ママ、愛してるわ」

母に抱かれ涙ぐみながら、アリエラ様も義母である王妃様にこうし

て愛して頂いてるかしら。

自分の高貴な片割れに思いを馳せた。

「さ、涙を吹いて支度をしましょう。アリエラ様に可愛いく育った妹の姿を見せてさしあげましょう」

1刻の後に、リセは黄薔薇色の絹地に髪と同じ色の絹糸で薔薇の刺繍を施したドレスに身を包み、玄關で家人に見送られ、使者と共に馬車に乗った。

馬車までエスコートした父は涙を溜めながらも、お前はパパが死ぬまで宝物の娘だよと言い続けた。

「パパったら、私はお嫁に行くわけじゃないのよ。お姉様にお会いしに行くだけ。お土産話をいっぱい楽しみにしていてね！」

改めて父の、父への愛に胸を熱くしながら、リセは朗らかに笑って見せる。

だがいつまでも見送る両親は、リセに応えるように微笑みながらも悲しい目をしており、リセの心を曇らせた。

## お姉様

リセの乗った馬車は、使者や内密の客が出入りする王宮の裏門から入り、そのまま奥宮へと進んだ。

幼い頃から、いつも城下から見上げていた白亜の宮殿。

建国時の古めかしくも繊細な装飾を施され、荘厳な雰囲気満ちていた。

家具などは決して流行の華美さはなく、質の良い伝統的なスタイルものが詠えてある。

それは、現在のこの城の主の気質をあらわしているようだ。

この城の主にしてキハの国を統べるのは、エドワルド4世陛下だ。貧しい小国だが、民を守るために心を尽くされる王は国民からとても愛されている。

そして、王室一家、王妃と4人の王子、そして王女も同様だった。その方達の住まう奥宮を、今リセは歩いていた。

最初に客間に通されるのかと思っていたが、向かったのはアリエラの部屋だった。

人払いしているのか、リセが顔を合わせたのは案内役の侍女しかない。

城内の者に顔を見られないようにと馬車の中で渡された黒いベールをかぶっているの、誰かと出会っても顔を見られることはないのだが、

重々しい静けさに満ち人氣のない奥宮は少し怖くもあった。

だが、一步アリエラの部屋に入るとそこは別世界だった。

日だまりのような優しい色に満ちたその部屋は、絨毯は橙の地に黄色でマリーゴールドの花が織り込まれ、壁はやさしいベージュに塗られ、花模様にはめこまれた銀の飾りが窓から差し込んだ光を受け

てキラキラ輝いている。

暖炉の上にはご家族の肖像画が飾られ、あまり使われないだろう文台には朝摘まれたばかりだろう、生き生きとした花があふれんばかり花が生けられている。

片側の壁には天井までたくさんの本が収められ、隣り合う広い窓のあるバルコニーごしからは城下が見える。

病弱な姫君は、いつもこの窓から私たちの街を見ていらっしまったのか。

リセは心の中が熱くなるのを感じながら、中央の寝台に向けて腰を折った。

天涯付きの大きな寝台は、淡いピンクのうす布のカーテンが下ろしてあった。

中にうつすら見える人影がアリエラに違いない。

深く礼をしたままのリセを置いて、この部屋へ案内した侍女は下がつていった。

また、ベッドの横に控えていた2人の侍女も部屋を出、年配の女官だけが残った。

「リセ様でいらっしやいますね。お初にお目にかかります。私は姫の乳母でユウナと申します。姫とリセのご誕生の折りにその場においた者にございます。どうぞお楽になさって、お顔のものをおとりください」

リセは顔をあげると言われるままにベールをとった。  
それを見て、ユウナは息を飲んだ。

「まさに姫様と瓜二つ…」

涙ぐみそれ以上言葉が出ないユウナに、カーテンの中から声がかか

った。

「リセ様がいらしたの？早くこちらにいらしていただいて」

そよ風が鈴をゆすつたようなやさしくもはかなげな声。

ユウナはあわてて涙を拭うと、カーテンを持ち上げてリセを招いた。リセははやる心を抑え、優美に歩み寄るとベッドの脇に膝をつき改めて礼の姿勢をとる。

「アリエラ様、イラカ家の息女リセ様です」

「リセです、姫殿下。お目にかかれて光栄です」

「あなたが、リセ様…お顔をよく見せてちょうだい」

そつと頭をあげた視線の先には、寝台の枕板の前に黄色や水色のクッションを積み重ね、そこに背中をもたせかけて座るアリエラがいた。

リセは驚いた。

はちみつ色の髪に同じ色の瞳の、リセと同じ顔がそこにはあった。いや、顔かたちは同じでも、二人はある意味対局にあった。

血色が良く何をしなくても桃色に染まる頬や赤い唇を持ち意思の強い瞳のリセが太陽ならば、アリエラは血の気がなく透き通るような白い肌に長い病の中で達観を含んだ瞳はりんとし大人びていて、神々しく輝く月だった。

姫が伸ばした自分よりずっと細く白い手をリセは両手でそつと握りしめた。

「リセ、私の片割れで私の妹。私はずっとあなたに合いたかったの。それがようやくかなったわ」

「私、今日まで殿下が私のお姉上であらせられることを知らなくて…ごめんなさい。でも、子供の頃からずっと姫様にあこがれていま

した」

「リセ、どうか姉と、アリエラと呼んで」

「アリエラお姉様」

「リセ、愛しい妹」

同じ顔のリセと姫君は手を取り合い、そして涙した。

一目会って分かった。

体だけでなく心の、魂の片割れだと。

その喪失感は、リセの心の底で常に感じていた。

庶民とはいえ、両親に愛され何不自由のない生まれ育って幸せだったが、それでも「何か足りない」もどかさやふと訪れる寂しさとなって現れていた。

だが、リセの存在を知っていたアリエラはどれだけこの日を焦がれていたことか。

リセはユウナにそつと背中を押され、おずおずと寝台の上に這い上がるとアリエラに抱きついた。

心の欠けていたところに、片割れの存在が鍵を差し込んだかのようにカチリとはまった。

なんという安らぎ。

お互い同じ思いだということが、言葉にしくなくても通じる。

二人は涙を流しながら黙って抱き合っていた。

## 父と兄

泣きつかれた二人は、用意してもらったぬれタオルで顔を冷やしながら、たわいもない話を楽しんだ。

陛下やお兄様達のこと、リセの両親や友達のこと。

「そういえばお姉様、絵姿で見たお顔と少し違いましたよ」

「そうなの。絵師の方が暗い時間にいらしていたので、髪が蜂蜜色ではなく蜂蜜を入れたお茶の色だったでしょ？それに鼻も口も小さいほうが上品ですから。私はこの鼻を気に入っているのに」

「私もですわ」

二人は、生まれた時から一緒に過ごしてきたかのように、揃ってくすくす笑い合った。

そんなリセの頭をアリエラは優しくなでる。

ママと同じで気持ちいい…

カモミールに薬草の入り交じった香りのする胸に抱かれていると、突然乱暴にドアが開き大きな足音で乱入者があった。

リセはあわてて寝台からおりようとするが、アリエラは微笑んで押しとどめた。

「ユウナ、街からの怪しげな客が姫宮に入ってしまったというが、人払いまでしてどうということだ」

「グレン殿下、どうぞお静かに…」

「お兄様、落ち着きになって」

「なっ、アリエラの寝台に何者！？しかもそなた泣いていたのか！すぐに姫から離れる！！人を呼べ」

王子殿下の乱入に、顔を隠そうとつさに姫のベッドにかけられていたシーツをかぶっていたのだが、妙な誤解を受けたらしい。

城下では沈着冷静と評判の第2王子のグレン殿下は、大層妹想いだっただけ。それは過剰なほどに。



「グレンお兄様その剣をお納めください。可愛いそうにこの子がおびえてしまっていますわ」

涙で目元を晴らしているが久々に見る妹の笑顔に、王子はしばらく剣を戻したが、つかつか寝台に歩み寄ると、妹の寝台に隠れている者をひきずりだした。

「む、女か。だがいくら女だからといって、キ八国第一王女に涙させるなど言語道断！親族に至るまで咎がないと思うな」

声を荒げる王子に、リセはシーツの下で震え怯える。さすがに見かねたアリエラは咎める声をあげた。

「兄さま、おやめください。彼女は怪しいものではありませんぬ」

「いい加減顔を見せぬか。どこの子女だ」

城に上がる際に顔は隠しておくようにときつく言い渡されていた為、王子に見せてよいのかわからず、必死でかぶっていたシーツをとられないように押さえていたが、やはり王子には叶わない。

「ああっ」

「お兄様、乱暴はよしてください」

とられたままの腕を後ろでひねりあげられた痛みで、布をはぎとられてしまった。

「これは…アリエラと同じ、顔？」

背が高い黒髪の王子は、理知的な美しい顔をゆがませて立ち尽くした。

「お、お初におめにかかります。イラカ家が長女、リセと申します。

あの、腕が痛いのですが…」

「…すまぬ」

なんとか手を離してもらい、リセはユウナに助けられながらアリエラの側で膝をついて礼をとる。

「イラカ家というと、リセの叔母上の嫁ぎ先だったな。では従妹殿か」

「いいえ、お兄様」

「アリエラお姉、いえ殿下、よろしいのですか？」

「ええ良いのです。お兄様ご紹介しますわ。リセのお顔を見ればお分かりでしょう。彼女は私のはらから。血を分けた妹ですわ」

「そんな…血縁であれば顔が似ていることもあるうが、王の血を引く妹姫であるわけが。この女に惑わされているのではないか？」

「リセへの無体な暴言、謝罪なさってくださいお兄様。一目みれば血の近さがお分かりでしょう？ それにこれは幼い頃にお父様から教えて頂いていたことなのです。生き別れの双子の妹がいると」

「それで、こうやって我らに隠れて合ってたのか？」

父娘の秘密を知った王子は、自分が疎外されたことに深く傷ついた顔をした。

アリエラ姫は、首を振って兄に愛情深く微笑んだ。

「いいえ、私たちはつい先ほど、初めて姉妹の名乗りをあげたばかりですわ。リセには成人まで出生のことは秘密と決められていたのに、私の我がままですらここに来てもらったのです」

「そんな、お姉様… わたくしはお会い出来て、お姉様がいたことを知ってどんなに嬉しかったことか」

「私もこれで思い残すことはなくなりました」

「アリエラ！お前なにを」

「この話はもう少し待って…あ、ちょうどいらしたわ。ユウナ、ドアを開けてさしあげて」

姫は、リセに側に顔を寄せるよう招くと、乱れた髪をそつとなでつけた。

その仲むつまじい様子をグレン殿下は複雑そうな顔で見つめた。

「国王、王妃両陛下、並びに王子様方がおこしです」

「皆様お入りになって」

リセはあわてて、家を出る前に教えられた最上の礼をとる。

「アリエラ、疲れてはいないか？調子はどうかね」

「お父様、今日はとても気分が良いのです。とても嬉しいことがあったので」

「そうかね。それで、私たちを呼んだのはどういうことだ？」

「お父様、お母様、そしてリオン兄様、グレン兄様、フレック兄様、そしてリノ兄様。ご足労ありがとうございました。実はご紹介したい方がいてお呼びしましたの」

「まさか…」

頭の上で、陛下の声が震えた。

「さ、顔をあげてちょうだい」

アリエラ姫は、体をずらして手を伸ばし、ドレスの裾を持つ手を握った。

リセが不敬を恐れながらそつと顔をあげた瞬間、その場の空気が凍り付くのを身体で感じた。

「そなたは…リセか？」

顔をあげると、目の前に国王が立っていた。

立ち並ぶ背の高い王子達よりも少し低いが一番肩幅の広い頑健な身体に乗った厳めしい顔が、リセとアリエラと同じ色の髪の毛とひげでやさしく縁取られている。

「イラカ家のリセでございます。国王陛下並びに王妃様、殿下の皆様方に拝謁できましたこと恐、きょー！？」

挨拶を最後まで述べさせてもらえないまま、リセは国王陛下に抱きしめられてしまった。

力一杯の包容に、息が苦しくもがいても弱まることわない。

「私のもう一人の娘よ。今までこの手で抱くことがかなわず済まなかった。私が父だ。今からでも父と呼んでくれるか？」

頷かなければこのまま絞め殺されそうで、涙にうるむ自分と同じは

ちみつ色の瞳の父に頷いてみせ、「お父上様」と呼びそつと頬に口づけた。

すると、再び緩みかけた腕に力を込められ、しかも子どものように抱き上げられてしまった。

妹姫と同じ顔の娘、そしていきなり親子の名乗りをした父王に、目を白黒させる王子達。

王妃は事情を知ってるようで、感極まる夫をニコニコと見守っている。

「これは、どういふことなのです？母上はご存知だったのですか？」

「あなた達も知っているでしょう？王家に双子は禁忌だと。リリア様はアリエラだけでなくリセ殿の2人を身ごもっておいでだったのですよ。それで最初に生まれたアリエラは私の子として王室が、リセ殿はリリア様のご実家の姉上が引き取られたのです。」

その時にご実家のほうからリセ殿のことは、成人するまで出生のこととはくれぐれも他言無用で秘密にと頼まれていたのですよ」

「私は、この身体のせいか感が鋭くて、リセ、あなたのことに気づいていたの。それでお父様に無理に教えて頂いたのよ」

アリエラ姫は妹を見てやさしく微笑んだ。

## 父と兄（後書き）

ごめんなさい、誤字脱字がいっぱいあったので修正しました。

## 約束

「今日は皆様にこのリセのことをお願いがあつて来て頂きました。先ほどお父様とお母様がおっしゃったように、このリセは私の妹です。」

双子が禁忌なのは承知の上ですが、これからは私と同じように娘として、妹として可愛がっていただけないでしょうか」

「もちろん、リセが良いなら私は喜んで今までの報いも込めて第二の姫として迎え入れよう」

「私も、もともとはお二人ともお育てするつもりでしたから、異論はございませんよ」

国王陛下と王妃は嬉々として応えた。

王子達はいきなりのことに複雑そうな顔をしているが、妹の言うがままに受け入れるだろう。

「ちょっとまってくださいませ、姫殿下、いえお姉様」

リセは、陛下に降ろしてくださいませと懇願しその腕から抜け出すと、アリエラ姫の枕元へとかけよった。

「私は、イラカの娘として育ちました。今の父母を愛しております。もちろん私に生を授けてくださった陛下にも感謝しておりますし、私にお姉様がいらして嬉しく思っております。」

ですが、恐れながら、今から家族を捨て王室へ入るわけにはいきません」

既に私には家族も人生もある。きっぱりと言い切るリセにアリエラは深く頷いた。

「わかっております。今まで慈しみ育ててくださったご両親を捨てるというのではありません。ご両親と同じように、家族の一員として陛下や兄上からの愛を受けて、そして愛して欲しいのです」

「つまり家族が増えるということですね」

「そう。私の代わりにどうか、家族をお願いできますか？」

「お姉様、なにを！？」

「アリエラ、どういうことだ」

「なんてことを言うんだ」

「お静かに。お願いですから私の最後の我がまを聞いてくださいまし」

姫の言葉に、部屋の中はしんとなった。

「皆様もお分かりでしょう？お母様と同じご病気を継いでしまった私は、幼い頃から余命がわずかだと言われてきました。それが幸せなことにこの年まで皆様の愛で生きながらえてきましたが、とうとう天上の方からのお迎えが来たようなのです」

「アリエラ……」

「私には分かるのです、お父様。それで約束をやぶり叔母上をお願いして、最期にリセと合わせて頂きました。私の、魂の片割れであるこの妹と」

アリエラは、もたせかけていた身体を再び起こし、リセに手を伸ばした。リセはその場に王室の方々がいることを忘れ、寝台に上がり姫の手をとり握りしめる。

「リセ、初めてあったあなたにこんなお願いをするのは心苦しいのです。ですが、ここで命つぎる姉の最初で最期の我がまな頼みです。私の分までキハの国の王女として生きてくださらないかしら」

「でも、私には家が…」

愛する家族と、家業を継ぐという夢があるリセ。

これが他の者の頼みであれば、丁重にお断りして帰り二度と敷居をまたぐこともなかっただろう。

だが、アリエラの言葉はリセの魂をゆさぶった。

彼女の願いを叶えたい。

心よりそう思ってしまったのだ。

思ったことに気付いてしまったのだ。

「お姉様、今までお幸せでした？」

「もちろん。この身体ゆえ限られた中ですが沢山の愛をいただき、いつも幸せでした。ただあなたに私の人生を生きてというつもりはありません。あなたの未来をあきらめるというのでもありません。」

ただ、私とあなたの未来をひとつにして、二人分謳歌して生きて欲しいのです。そして、あなたなりに王家の一人として、私の家族と国の支えとなってもらえませんか？」

「分かりましたお姉様。私の魂にかけて誓いますわ。でもお姉様は、私と一緒に未来を歩いて頂かなくてはこまります。これからは出来るだけお側におりますからどうぞ一緒に色々なことを致しましょう。私が楽しいことをいっぱい教えて差し上げます。もちろん、微力ながら実の父上様と兄上様方をお助けしたいと思っております」

「ありがとう、リセ。思った通り素敵な妹でよかった。あなたと姉妹で本当によかったわ」

アリエラは目に涙をためながらも、今まで見せた事のない輝くような心からの笑顔を見せた。

「王女という生き方は、時にあなたには重い枷になるかもしれませ



ん。どうしても無理であれば、迷わず自分の幸せを優先なさい。」

姉として諭すようにやさしくリセに告げると、今度は周囲で見守る者たちに顔を向けた。

「お父様、お母様、お兄様。私が亡き後は私へ注いでくださった愛と同じだけリセを愛してくださいませ。ですが、リセは半身ですが私ではありません。新しい娘、妹として家族の一員としてくださいますようここで約束していただけませんか？」

「わかった。もちろん約束しよう」

陛下は寝台にかがみこむと二人の娘の頬に口づけた。

「兄様達もお願い」

アリエラは、幼いころに戻ったような無邪気な顔で、小首をかしげて兄達に微笑みかけた。

四人は大切な妹の頬と、新しい妹妹姫の頭に口づけた。

その後、姫が疲れを見せた為に一同は姫の部屋からひきあげた。リセはまた必ず会いましょうと姉と別れを惜しみ、部屋を出ると改めて王室一家に挨拶をし暇を告げた。

## 第二王女の誕生

王は自らリセを馬車まで送ると、自ら馬車に乗り込みリセと差し向かつて座った。

「今日はわざわざすまなかったね」

「陛下、お姉様とお会いでき、そして陛下にお会い出来とても嬉しい日でした」

「水くさい、これからは遠慮なく父と呼んでくれ」

「ではお父様」

照れくさそうに俯いて呼ぶリセに、王は顔をほころばせ、いつもアリエラにしていたように、リセの頬に落ちる髪の毛をそつと耳にかけた。

そして野バラのように生の輝きに満ちたこの娘を、もう一人の温室で可憐に咲く姫のことを思いながら喜びと悲しみの入り交じった瞳で見つめた。

「私も、そなたに会えてよかった。そなたやそなたの母を忘れた日は一度もなかった…。イラカの方々はそなたを大切に慈しんで育ててくださったようだな」

「はい、イラカの両親は私にとって自慢の父と母です」

「それはそちを見ればすぐに分かる。そなたがここまで健やかに育ったのだから」

「ありがとうございます」

「父としては、そちが幸せであるならこのままそなただけの生涯を送ってほしい。だが、世は父である前にこの国の王なのだ。王として動かねばならぬ時があることを出来るなら分かってほしい」

「それは心得ております」

「アリエラは強い子だ。今まで必死に生きてきてくれた。もちろんこれからもそうあってほしいが、命が尽きようとしていることは目をそらすことができない事実だ。それで改めてそなたに頼みがある」

目の前の王の苦渋で満ちた顔に、リセは真剣な顔で頷く。

「そちが生まれた時に忌ましき習慣に従い、王命をもって姉妹をひきさきそなたはいずこかへ引き渡されるか命をとらねばならなかった。だがそちの母が今際の際であつたのに、気丈にもそちを姉の子にしてほしいと訴え手配したのだ。そしてこの度もアリエラが先手を打ってこういう形で相見えることになった。本当に世は情けない夫で父じゃ。」

「お父様、そんなことは…」

「だがここは娘の尻馬に乗ろう。リセよ。そちはこれからも今のこ両親の子でかまわぬ。だが、そのうえで王女として、私たちの子にもなつてほしいのだ」

「私が王女に？」

「そうだ。王女としてこの国に力を貸してほしい。情けない話だが、我が国は窮しておる。財以上に人にもだ。王子達も十分に助けられるが、王女の力も時に必要なのだ」

「私に、姉上様の代わりが勤まりますでしょうか？」

真摯なリセの眼差しに、王は柔らかに微笑んだ。

「ありがとう。だが、アリエラになる必要はない。リセはリセで良いのだよ。どうだろう、お前の力で私たちを助けてくれないか？」

「わかりました。ではもしその時が来れば、私はいつでも父上様達をお助けし、国の為に尽くしましょう」

「すまない、感謝する」

王は深く頭を下げ、膝に乗せたりセの手をとり口づけた。

リセは、遠くない先のことだろうという予感があつたが、その日はすぐにやってきた。

王宮を訪れて3日後、長年病に伏した王女、アリエラ・ジユス・キハの崩御が伝えられた。

病床の為国民の前に出ることはなかったが、常に第一王女の気遣いを感じ敬愛していた国民は悲しみ、国中の玄関に喪章が掲げられた。王女の葬儀は、王都の主神殿でとりおこなわれた。

国王を始めたとした王室一家をはじめ臣民問わず多くの人が参列し、王女を惜しみ、悼んだ。

葬儀の最期に、死を予感していたアリエラが用意していた遺書が公開された。

そこには家族への愛と国民への愛、そして生き別れた妹への愛が記されていた。

そして、そこで参列していた一人の少女が司祭の手で祭壇に立つ王の許へ導かれた。

陛下に手をとられて祭壇の中央に立った喪服の少女が顔をあげた時、王家一家をのぞく数少ない第一王女を知る者は皆息を飲んだ。

中央に立ったこの新しい姫君が、第一王女と瓜二つだったからだ。

第二王女、リセ・マリエル・イラカ・ジェス・キハ。

庶民育ちの王女、そしてこの国を新しい道に導く王女。

ここからリセの王女としての人生が始まった。

(終わり)

## 第二王女の誕生（後書き）

本来は長編でこれは1章のつもりだったのですが、なかなか手がまわらない為、一度これで区切りをつけさせてください。

続きは短編というかたちで少しづつ書き溜めていけたらなと思っています。

中途半端な形でお待たせして申し訳ありませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9722p/>

---

プリンセス商会

2011年8月9日10時35分発行